

フィリピンにおけるバナナ生産と マニラにおけるバナナ販売の変化

北西功一・埴 狼星*¹

The Changes in the Production of Banana in the Philippines and the Sale in the Manila

Koichi KITANISHI and Rosei HANAWA

(Received September 26, 2008)

1. はじめに

現在、日本においてバナナという言葉で思い浮かぶ国はフィリピンだろう。実際、日本に輸入されているバナナの87%はフィリピンからである（財務省貿易統計：2006年のデータ）。日本人の多くは、フィリピンの人たちも日本人が食べているバナナと同じバナナを食べていると漠然と思っているかもしれない。しかし、フィリピンの人たちが日常的に利用する市場やスーパーマーケットで売られているバナナのかなりの部分は、私たちが食べているバナナと異なるものである。さらにその栽培方法や生産単位も異なっている。

これまでフィリピンのバナナに関する研究では、農学的研究（栽培技術、病害虫など）以外に社会・経済的研究がいくつか存在するが、それらは輸出用のバナナ栽培に関わるものが中心で、特にドール、デルモンテ、チキータなどバナナ多国籍企業に関係するものが多い。少し過去になるが、輸出用バナナ栽培全般に関わる研究として最も有名なものに、鶴見良行の「バナナと日本人」がある（鶴見，1982）。この本では、日本に輸入されるバナナがどのように作られるのか、またそれを栽培している人々がどのような状況にあるのかについて詳細に述べられており、日本人に衝撃を与えた。中村（2005）では、鶴見（1982）以降の多国籍企業のプランテーションとその労働者や土地問題、農業問題を取り上げている。また Hayami et. al. (1988) や藤木（2001）では、フィリピンにおける農地改革と多国籍企業の関係や多国籍企業のバナナ貿易について述べられている。FAO（国際連合食糧農業機関・Food and Agriculture of the United Nations）から出されている The world banana economy 1970-1984 と The world banana economy 1985-2002 においても輸出用バナナについてしか記述はない。

一方、フィリピンのバナナを生産のうち3分の2程度は国内で消費されている（2006年：Country STAT-Philippines）が、国内消費用のバナナ栽培や流通についての研究はほとんどない。Yorobe (1999) はバナナの流通を離島のバナナ産地の生産者からマニラの小売店まで追った研究であるが、その論文にもこのような研究はこれまでなされていないと述べられている。

本稿は2002、2005、2006年におこなった現地調査と統計資料に基づいてフィリピン、特に首都マニラにおけるバナナの販売について分析する。フィリピンでは貧富の差が大きく、豊かさの度合いによって買い物をする場所が異なる。マニラではある程度豊かな人たちはショッピング

* 1 同志社大学非常勤講師

グモールに出かけ、そこに併設されているスーパーマーケットで食料品の買い物をおこなう。一方、庶民は市場で食料品を購入している。現地調査の結果、市場とスーパーマーケットの間でバナナの売られ方に違いがあることがわかった。また、2002年と2005、2006年を比較すると、市場ではほとんど変化がなかったが、スーパーマーケットでは売られているバナナの品種や値段、売られ方に変化が見られた。具体的には、バナナのブランド化と包装の充実、ドールのキャンディッシュ (Cavendish) の値段の上昇などである。本稿ではこのような変化が生じた要因について考えてみたい。

最初に、フィリピンにおいて栽培されているバナナの品種を簡単に紹介した後、輸出を目的とした大規模バナナ・プランテーションの導入に伴う生産の変化について述べる。次に、マニラにおけるバナナの販売について詳しく述べていく。最後に、フィリピン国内のバナナの生産と流通の構造の変化を示すとともに、日本とのかかわりについても述べてみたい。

2. フィリピンおよびマニラの概要

フィリピンはアジア大陸の東南に位置する大小7,106の島々からなる島国である。ルソン (Luzon) 島が最も大きな島で首都マニラもこの島にある。南部にはフィリピンで二番目に大きな島であるミンダナオ (Mindanao) 島がある。人口は2007年8月現在で8857万人である (National Statistics Office)。

フィリピンの経済指標をいくつか紹介しよう。2006年のGDPは6兆326億ペソ (1176億米ドル) で、一人当たりのGDPは1363米ドルである。アジア通貨危機の影響で1998年はGDPの実質成長がマイナスになったものの、2002年からは毎年5%前後の成長率を示している (アジア研ワールドトレンド2000-2007)。貧富の差は東南アジアの中では比較的大きい方でジニ係数は46.1となっている (国連開発計画, 2007: 2000年のデータ)。

フィリピンの首都マニラ¹⁾の人口は2007年の国勢調査では1155万人となっており、フィリピンの人口の13%を占めている。また、フィリピンは地域間の経済格差が大きく、マニラの1家族の平均所得はその他の地方の2倍程度となっている (National Statistics Office: 2006年のデータ)。

3. 現地調査の概要

フィリピンの現地調査は合計3回おこなった。最初の調査は2002年3月で北西と埜の2名が3週間程度フィリピンに滞在した。この時は首都マニラおよびフィリピン南部のミンダナオ島と、ルソン島の西にあるミンドロ (Mindoro) 島を訪れ、バナナの販売形態、品種、価格を調査した。またフィリピンのバナナ研究者であるエスピノ博士 (フィリピン大学ロス・バニョス校農学部) とバスクア氏 (ダバオ国立作物研究開発センター) と面会し、フィリピンのバナナに関する情報を得た。

2005年8月と2006年9月には北西がそれぞれ10日間程度マニラに滞在し、スーパーマーケットと市場をまわってバナナの販売形態、品種、価格を調査した。

4. フィリピンにおけるバナナの品種

栽培バナナはムサ・アクミナータ (*Musa acuminata*) とムサ・バルビシアーナ (*Musa balbisiana*) の2種の野生種のどちらかもしくは両方を祖先としている。ムサ・アクミナータとムサ・バルビシアーナ両方の野生種が存在しているフィリピンではこれまで多様な栽培品種

が生み出されてきた²⁾。東南アジア各国のバナナの品種を比較した Valmayor et. al. (2000) によると、フィリピンの品種数は87であるのに対して、マレーシア49、インドネシア64、タイ47、ベトナム54となっている。

フィリピンの農家は多様な品種のバナナを栽培していたようである。ミンドロ島の山岳少数民族タジャワンを1980年代に調査した小幡は26の品種を確認している（小幡私信）。また、インドネシア、ベトナム、マレーシアなど東南アジアの他の国のバナナ栽培地でも20から40近くの品種が見られる（小松他，2006）。

一方で現在、フィリピンの市場やスーパーマーケットで見かけるバナナの品種は限定されている。よく見る品種としては、生食用ではラカタン (Lakatan)、ラトゥンダン (Latundan)、セニョリータ (Señorita)、キャベンディッシュ、料理用ではサバ (Saba) があげられる。また、フィリピン国内での地域的な違いもあまりない。ミンダナオ島の中心都市ダバオではサバの代わりにカルダバ (Cardava) という品種が料理用として大量に売られていたのが目立つくらいであった。ミンドロ島の中心都市カラパンでも上にあげたもの以外の品種のバナナを売っている店は稀で、またあってもその量は少ない。他の東南アジアの国々でも市場でバナナを観察したが、これほど品種が少ないことはなかった。さらに、同じ島国であるインドネシアでは島ごともしくは民族ごとにバナナの品種名の多くが異なっている（北西他，2000）。

フィリピンのバナナの流通の特徴の一つは、販売用の品種が多数の栽培品種から選ばれたものであり、しかも国全体で統一されていることである。このことから国内の地域ごとに流通圏があるのではなく、国全体が一つの流通圏になっていることが伺える。実際、ミンダナオ島で栽培されたバナナで販売用のものの多くはマニラに出荷されているという情報を現地調査で得た。さらにミンドロ島東部で調査をした Yorobe (1999) も主としてマニラにバナナが出荷されているという。マニラの巨大な人口と富が国中のバナナをひきつけているといえるだろう。

簡単にそれぞれのバナナの特徴を紹介しておこう。キャベンディッシュは日本で普通に食べられているバナナと同じものである³⁾。ラカタンはキャベンディッシュに比べるとやや小ぶりで味は濃厚である。ラトゥンダンはラカタンよりももう少し小ぶりで、やはり味は濃厚であり、酸っぱ味が少し強い。セニョリータは最近日本でも見かけるようになったかなり小ぶりのバナナで、日本ではモンキーバナナとして知られている。味はあっさり目である。サバはごつごつした形の料理用バナナで、熟して黄色くなる前に蒸す、煮る、揚げるなどして食べる。バナナ風味のイモといった感じである。フィリピンの街角ではサバを串に刺して揚げたバナナ・キュー (banana cue) の屋台をよく見かける。

5. フィリピンにおけるバナナ生産の概要

2005年のフィリピンにおけるバナナの生産量は6,298,225トンで、世界第6位である。フィリピンのバナナ生産は、1960年代はおよそ100万トン前後を推移していたが、1970年代に入ると急激に伸び、1980年代から1990年代中ごろまでは400万トン前後を上下し、1990年代後半から再び上昇に転じていて、現在に至っている（図1）。

フィリピンのバナナ生産は大きく二つに分けることができる。それは輸出用の栽培と、自家消費もしくは国内市場向けの栽培である。1963年に日本のバナナの輸入の数量制限が撤廃されると、それ以前から輸入されていた台湾産のバナナに加えて、南米のエクアドル産のバナナが輸入された。日本のバナナの輸入量はその後急激に増大したが、日本の需要に対応するためにチキータ、ドール、デルモンテといったブランドで知られるバナナ多国籍企業がフィリピンに

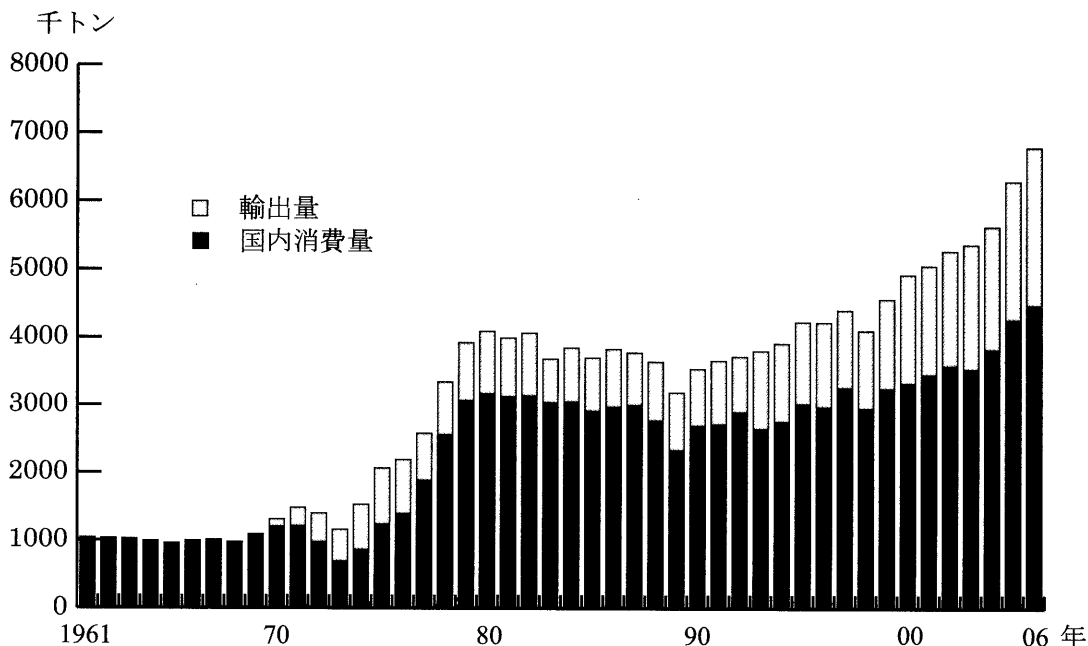


図1. フィリピンのバナナの生産量と輸出量の推移 (1961-2006)

国内消費量は輸出量から全生産量を引いた値とした。全生産量は1961年から1989年まではFAOSTAT、1990年から2006年まではCountrySTAT Philippines、輸出量はFAOSTATをもとにした。

進出し、1960年代末にバナナ輸出産業が形成された。1970年代前半にバナナの輸出量は急増し、1970年には55,000トンだった日本への輸出が1975年には763,000トンになった。多国籍企業がフィリピンに目をつけたのは日本からの距離が近いこと⁴⁾と生産コストが低いことであった(鶴見, 1982)。

フィリピンの輸出用バナナは当初日本市場向けに生産されており、日本における需要が大きな影響力を持った。1975年の後、一時的にフィリピンからのバナナの輸入は減少傾向にあるが、これは日本人がバナナに慣れ親しんできたため当初持っていたエキゾチックな魅力を失ったこととその他の果物へと嗜好が多様化したためである(FAO Commodities and Trade Division, 1986)。1982年に日本のバナナ業者が3600万ドルの損失を被り、1983年に日本へのバナナの輸出がかなり減ったが、それ以降、輸出量は上下しつつも全体としては増加傾向にある。特に1990年代から2006年までの増加が著しい。これは日本への輸出に加えて、中国、台湾、韓国、アラブ首長国連邦、イランへの輸出の増加が影響している。2000年時点ではフィリピンのバナナの輸出のほぼ60%が日本向けであったが、2004年では51%に低下しており(BAS, 2005a)、輸出相手国が多様化しつつあるといえる。

輸出用と国内消費用のバナナでは一般に栽培方法がかなり異なる。輸出用のバナナの多くは機械化された大規模プランテーションで栽培されている。また、世界中の輸出用プランテーションで共通して栽培されているキャベンディッシュが植えつけられている。

大規模プランテーションでは化学肥料と農薬が大量に投入されることが多い。1950年代まではグロス・ミシェル(Gros Michel)という品種が世界中の大規模プランテーションで主流だったが、この品種はパナマ病という病気にかかりやすく、1960年代にはキャベンディッシュに植え

替えられた。しかし、キャベンディッシュはパナマ病には強いものの、ブラック・シガトカ病などの他の病気に感染しやすい。一方、大規模プランテーションのキャベンディッシュは土地生産性が高い。フィリピンのバナナの土地生産性の平均値は9.4t/haであるのに対して、大規模プランテーションでは40t/haの収量があるという (Arias, 2004)。

このような高インプットの農業を家族経営の農家が独自でおこなうことは技術的にも経済効率的にも難しい。例えば、ブラック・シガトカ病の予防のための農薬は飛行機によって撒布されており、これは大規模農場でなければ不可能である。また、輸出用のバナナは国内消費よりも高い品質が要求されるため、傷のつかない収穫・出荷システムや、洗浄と選別をおこなうプールの付いたパッキング施設が必要で、また果皮や果柄の痛みを防ぐためポスト・ハーベスト農薬が用いられることもある。これらには多くの投資が必要である。

輸出用の大規模バナナプランテーションはフィリピン南部のミンダナオ島に集中している。その理由にはまず自然的要因があげられる。ミンダナオ島には、一年を通じて雨が降る、土地が平らである、土壌が良い、台風の通り道から外れているなどバナナの栽培に良い条件が揃っている (FAO Commodities and Trade Division, 1986)。一方、鶴見 (1982) は、フィリピンがかつてアメリカの植民地だったこと、ミンダナオ島のフィリピンにおける位置づけ、土地の入手が比較的容易だったことなどの歴史的、社会経済的な要因も重視している。

輸出用バナナの生産組織は大きく3つに分かれる。一つ目は多国籍企業の支配下もしくは影響下にある農場である。二つ目はフィリピン人資本の大農場であるが、1970年代から80年代の間に経営の失敗のためバナナ多国籍企業の影響下におかれたものが多い。3つ目はバナナ多国籍企業と契約を結んだ自営農家である (FAO Commodities and Trade Division, 1986; 藤木, 2001)。農家は自分の土地で栽培したバナナを多国籍企業に売り、会社は技術指導と農薬、化学肥料などを含む栽培に必要な物品を提供する。これらの農家が借金に苦しみ土地を手放していった過程は鶴見 (1982) に詳しく述べられている。FAO Commodities and Trade Division (1986) によると、1971年に439あった自営農家は1984年には254に減少した。ただし、1990年代後半からは一部のプランテーション労働者が農地改革受益者協同組合を結成し、多国籍企業からの自立に向けて歩みだしたケースもある (中村, 2005)。

自家消費もしくは国内市場用の栽培の方法は多様である。バナナの単作の畑もあれば、他の作物と混作されたり、田んぼの畦や家の庭などちょっとした空間があればそこにバナナが植えられていることもある。一般に機械化は進んでおらず、農薬や化学肥料の投入は大規模プランテーションに比べると少ない。品種は市場で見かけるラカタン、ラトゥンダン、サバなどが多いが、それ以外の市場には出回ることの少ないいろんな種類のバナナも植えられている。

二つの生産のやり方に留意してバナナに関する統計資料を分析してみよう (表1。データはBAS (2005b) とBAS (2007) を用いた)。輸出用の大規模プランテーションはミンダナオ島の Davao 地方⁶⁾ と SOCCSKSARGEN 地方に集中している (中村, 2005)。この二地方を合わせるとフィリピンのバナナ生産の半分以上を占めている (表1: 2006年で55.6%)。二地方で生産されるバナナには輸出されるものと国内で消費されるものの両方が含まれているが、正確な数字はわからないものかなりの部分は輸出用のバナナで占められていると考えていいだろう⁷⁾。

この二地方とそれ以外の地方を比較してみると、土地生産性では4倍、1本あたりの収量と植付密度では2倍程度の違いが見られる (表1)。この数字からも大規模プランテーションとそれ以外でバナナの栽培方法がいかに違うかがわかる。つまり、輸出用大規模プランテーシ

表 1. 大規模バナナ・プランテーション地域とそれ以外の地域の差異

	1990	2000	2006	90→00*	00→06*
全国生産量(1000t)・A	3,539.62	4,929.57	6,794.56	1.39	1.38
輸出量(1000t)・B	839.78	1,599.93	2,311.54	1.91	1.44
国内消費(1000t)・C	2699.84	3329.64	4,483.02	1.23	1.35
D+S生産量(1000t)・E	1,388.58	2,321.97	3,776.67	1.67	1.63
全国作付面積(ha)・F	311,819	382,491	428,804	1.23	1.12
D+S作付面積(ha)・G	50,659	73,648	100,076	1.45	1.36
全国本数・H	137,097,761	181,094,490	228,036,614	1.32	1.26
D+S本数・I	29,396,726	55,287,040	95,721,890	1.88	1.73
D+Sの土地生産性 (t/ha)・J	27.4	31.5	37.7	1.15	1.2
D+S以外の土地生産 性(t/ha)・K	8.2	8.4	9.2	1.03	1.09
D+S植付密度 (本/ha)・L	580	751	956	1.29	1.27
D+S以外の植付密度 (本/ha)・M	412	407	403	0.99	0.99
D+S1株あたり収量 (kg/本)・N	47.2	42.0	39.5	0.89	0.94
D+S以外1株あたり 収量(kg/本)・O	20.0	20.7	22.8	1.04	1.10

D+SはDavao地方とSOCCSKSARGEN地方をあわせたもの。

C=A-B, J=E/G, K=(A-E)/(F-G), L=I/G, M=(H-I)/(F-G), N=E/I, O=(A-E)/(H-I)

出典：BAS(2005b)、BAS(2007)

*：90→00は1990年と2000年の比、00→06は2000年と2006年の比である。

ンではバナナ1本あたりの収量が高い品種を密に植えることによって高い土地生産性をあげているのである。

この二地方は1990年から2006年にかけて3倍近く生産を伸ばしている(表1)。生産の伸びは作付面積の増加の影響が大きい、それに加えて植付密度を上げることによってバナナの植え付け本数を増加させている。一方で、1株当たりの収量は減少しつつある。

輸出量と二地方の生産量の変化について見てみよう。1990年代、輸出量は1.91倍伸びているが、二地方の生産量は1.67倍で、輸出量の伸びよりも少ない。しかし、2000年代になると、2006年までの輸出量の伸びは1.44倍であるにもかかわらず、生産量は1.63倍となっており、生産量の増加率のほうが高い。これは、2000年代中ごろにおいて二地方で生産されるバナナの中で国内市場に流れていくものが増えていることを示唆している。つまり、大規模プランテーションで栽培されたバナナが国内市場にも流通するようになったのである。次章でマニラにおいて

このバナナがどのように流通しているかわかるだろう。

6. マニラにおけるバナナの販売

(1) スーパーマーケットと市場での販売形態

マニラの消費者は主にスーパーマーケットもしくは市場でバナナを購入している。スーパーマーケットにはレベルがあり品揃えや値段が異なるが、最も客を集めているのはショッピングモールにあるものだろう。ショッピングモールにあるデパート（例えばSMといったチェーン店）の一部が食品を中心としたスーパーマーケットとなっていることが多い。

2005、2006年の調査で私はマカティ市（マニラ首都圏の中の市）の知人宅に滞在したが、そこはマニラで最大級のマカティのショッピングモールから歩いて5分くらいの場所であった。そのLandmarkというデパートでは、衣料品や香水、フィリピンのお土産物が地上階で売られているが、地下はスーパーマーケットになっており、多彩な食料品が売られている。肉、魚、米、野菜、果物、酒、スナック類はもちろん、豆腐などの日本食もあった。

ここでの販売形式は日本のスーパーマーケットとだいたい同じである。棚にきれいに並べられた商品を自分で専用のかごに入れ、最後にレジで代金を計算し支払う。クレジットカードでも支払いが可能である。商品にはすべて値札がついており、値切ったりすることはない。肉や魚などのなま物は冷蔵状態で陳列されており、日本人から見ても清潔である。また、デパート全体にクーラーが効いており、快適に過ごせる。言語が英語もしくはフィリピン語でお金がペソ表示だということ以外に日本との目立った違いはない。マニラ各地のスーパーマーケットはほとんどがこの形態である。

2002、2005、2006年のマニラ滞在のたびに新たな巨大ショッピングモールが次々とマニラに建設されている。このような場所で買い物をする人々は増えていると予想される。

マニラには食料品を販売する市場がいくつもあり、大勢の人々が連日買い物をしている。その形態は日本の市場と同じで、小さな区画を割り当てられた人が限られた商品を販売し、支払いもそこで済ませる。肉なら肉を売る店ばかり（さらに鶏肉、豚肉と分かれていることも多い）、魚なら魚の店ばかりといったように同じような商品を扱う店がいくつか並んでいるのが一般的である。迷路のような市場の中を時には人波にもまれながら買い物をする。日本人の多くは特になま物を扱う市場に近づくのに抵抗を感じるかもしれない。肉や魚はパックに入っていることはなく、そのまま並べられている。特に肉はブタの足が1本そのままぶら下がっていたり、内臓がそのまま置かれていたりする。また、冷蔵設備ではなく、せいぜい氷が敷いてあるだけで、見た目では衛生状態が良いとは言えない。

市場では一般に値段を表示していないが、店によっては1kgあたりもしくは1山あたりの値段を示した値札を出している場合もある。地元の人には相場がわかっているので買い物で問題はないだろう。私が購入する場合は相場よりも高い値段を言われることもあったが、交渉をすれば下げてもらえるし、おまけで量を増やしてもらうことも多い。地元の人もある程度交渉によって少し安くしてもらったり、おまけで量を増やしてもらったりしているようである。

一般に、市場での商品の値段はスーパーマーケットよりも安い。ただし、どれくらい安いかは商品によって異なる上、品質の違いもあるので一概には言えない。フィリピンの主食である米を例にあげておくと、2006年の調査時、市場では1kgあたり20ペソ⁸⁾前後のものが多かったのに対して、スーパーマーケットでは35ペソくらいのものが一般的で、スーパーマーケットの方が1.75倍程度高い。

値段や品揃えの違いのため、両者の客層には違いがあると思われる。ショッピングモールやスーパーマーケットには比較的裕福な人たち（いわゆる中間層）が、市場には一般の庶民が利用しているようである。

(2) 統計資料から見たフィリピンのバナナの価格

私が現地調査で確認した値段の分析の前に、フィリピンの農業省・農業統計局の資料をもとにフィリピンのバナナの価格の一般的な傾向を見てみよう。フィリピンの農業省・農業統計局のホームページには1990年から2004年までの主要な農作物の小売価格（1994年もしくは2000年を基準にした相対的な価格）が掲載されている。この価格の調査は、フィリピン全体でマニラを含むいくつかの売買の中心地を選んで週に2、3回おこなわれている。その価格の動向を表2にまとめた。

表2. フィリピンにおけるバナナの小売価格の推移

年	ラカタン		ラトゥンダン		サバ		RPI		消費者物価指数	
1990	50.1		51.8		58.1		51.9			
1991	58.6	17.0%	62.0	19.6%	68.2	17.5%	56.7	9.2%		
1992	68.2	16.3%	71.8	15.9%	74.5	9.3%	62.5	10.3%		
1993	69.2	1.5%	72.1	0.5%	76.1	2.1%	65.1	4.1%	60.1	7.6%
1994	76.8	10.9%	82.0	13.6%	89.1	17.1%	72.8	11.9%	65.7	9.1%
1995	74.6	-2.8%	83.6	2.0%	90.2	1.2%	79.3	8.9%	70.9	8.1%
1996	83.8	12.3%	94.2	12.7%	98.9	9.6%	90.7	14.3%	77.3	9.0%
1997	87.6	4.5%	94.3	0.1%	98.9	0.0%	91.3	0.7%	81.8	5.9%
1998	93.5	6.8%	101.6	7.8%	105.4	6.6%	97.6	6.9%	89.8	9.7%
1999	104.9	12.1%	112.3	10.5%	112.0	6.2%	100.1	2.5%	95.8	6.7%
2000	100.0	-4.6%	100.0	-11.0%	100.0	-10.7%	100.0	-0.1%	100.0	4.4%
2001	102.7	2.7%	108.2	8.2%	107.6	7.6%	104.1	4.1%	106.8	6.8%
2002	106.0	3.2%	110.7	2.3%	112.0	4.0%	104.9	0.8%	110.0	3.0%
2003	107.6	1.5%	110.7	0.0%	113.0	1.0%	106.3	1.3%	113.8	3.5%
2004	116.2	8.0%	119.7	8.1%	129.4	14.4%	115.3	8.5%	120.6	6.0%

数字は、左が2000年を100とした値、右が前年からの変化（%）。RPI (Retail Price Index) はそれぞれの農産物の重要度に応じて重み付けをして価格の変化の平均値を出したもの。米が約39%、肉が約15%、果物が約9%などとなっている。

農産物の価格はBAS (2003)、BAS (2006)、消費者物価指数はアジ研ワールドトレンドをもとに計算した。

ラカタン、ラトゥンダン、サバの3品種の価格の変化をみると、まず全体的に上昇傾向にあり、2004年の値段は1990年の2.2-2.3倍程度になっている。農産物全体の価格の平均も2.2倍であり、ほぼ同じである。値段の上下やその幅には年ごとに違いが見られるが、その違いの傾向はラカタン、ラトゥンダン、サバの3品種でほとんど同じである(表3)。また、農産物全体の傾向ともある程度一致する。さらに消費者物価指数と比較すると農作物全体ほどではないが、ある程度同じ傾向が見られる。BAS (2003)、BAS (2006)には月ごとに価格が掲載されており、それを見ると、数年に一度10%を超えるような上下が生じているが、その多くは次の月に元の値段近くまで戻っている。変化の原因は不明であるがあくまでも一時的なものであり、全体としてバナナの価格は急激に上下するものではないといえる。

表3. バナナおよび農産物、消費者物価指数の変化の相関関係

	ラトゥンダン	サバ	RPI	消費者物価指数
ラカタン	0.92	0.80	0.60	0.45
ラトゥンダン	-	0.92	0.73	0.61
サバ	-	-	0.72	0.49
RPI	-	-	-	0.77

数値はそれぞれの相関係数。表2の変化の割合から計算した。

年ごとのフィリピンでのバナナの生産量の上下とバナナの値段の上下との間に関係は見られない。例えば、2000年にはバナナの値段が急落しているが、2000年の生産量が急に増えたわけではなく(図1)、この年はバナナほどではないが農作物全体の価格もわずかに下落している。これらからすると、バナナの値段は他の農作物や物価そのものと連動する形で上昇しており、品種ごとに大きな違いは見られない。

2004年から現在までについては、週2、3回おこなわれるマニラの卸売市場と小売市場におけるラカタンとラトゥンダンの値段の調査の結果がホームページで紹介されている(Metro Manila Price Bulletin)。また、2006年9月からは市場のほかにスーパーマーケットの値段も掲載されている。表4はそれを年ごとにまとめたものである。

表4. 2004年から2007年のマニラにおけるバナナの価格の変化

市場(マニラの11の市場のデータ)

	ラカタン			ラトゥンダン		
	一般的	最低	最高	一般的	最低	最高
2004	25.00	21.42	29.97	25.00	19.54	28.53
2005	25.33	22.40	30.00	25.00	20.10	28.33
2006	27.49	23.98	30.00	25.00	21.79	27.94
2007	29.93	25.00	31.96	25.00	22.92	27.26

スーパーマーケット（マニラの8つのスーパーマーケット）のデータ

	ラカタン		ラトゥンダン	
	最低	最高	最低	最高
2006*	30.00	33.89	28.78	31.80
2007	33.04	35.94	29.76	33.75

値はすべて1 kgあたりの値段（ペソ）。

*：スーパーマーケットの2006年のデータは9月から12月までのもの。

Metro Manila Price Bulletin の資料をもとに計算した。

小売市場におけるラカタンの一般的な値段は2004、2005年では25ペソ/kgだったが、2006年3月から上昇し始め、2007年には30ペソ/kg程度になっている。一方、ラトゥンダンの価格は2004年から2007年までほとんど変化がなく25ペソ/kgのままである。市場では日ごとの値段が大きく上下することはない。また、市場ごとの小売価格は最も高いところと安いところで1 kgあたりラカタン、ラトゥンダンともに5～10ペソ程度の違いがある。このような市場ごとの違いについてはあとで説明する。

スーパーマーケットの値段では、ラカタンは2007年3月に上昇し、そのあとは一定、ラトゥンダンは2007年2月に上昇したが6月にはもとの水準に戻っている（Metro Manila Price Bulletin）。スーパーごとの値段の差はあまりない。

スーパーと市場との値段を比較すると、平均1 kgあたりラカタンは4ペソ、ラトゥンダンは6ペソ程度スーパーの方が高く、倍率にするとそれぞれ1.15倍と1.25倍で、他の商品に比べると差は小さいように見える。ただし、2005、06年にはスーパーマーケットで売られているバナナの中でキャベンディシュが重要となりつつあり、さらに細かい検討を次におこなう。

(3) マニラでの現地調査の結果⁹⁾

(i) スーパーマーケットのバナナ

ここでは、2002、2005、2006年におこなった現地調査に基づいてマニラにおけるバナナの販売を分析する。なお、各スーパーマーケット、市場は1回しか訪ねていないものもあるが、Metro Manila Price Bulletin に載せられている日々の値段のデータからすると日ごとに大きく値段が変わることはない。

まず、スーパーにおけるバナナについて見てみよう（表5）。2002年にスーパーで売られていた品種はラカタン、ラトゥンダン、キャベンディシュ、サバの4種類であった。このうち、キャベンディシュにはドール（Dole）のラベルがついていたが、他のバナナにラベルはない。ただし、キャベンディシュも日本のようにビニール袋に入っておらず、他のバナナと同じように無造作に棚に並べられていた。また棚に並んでいる量はラカタンとラトゥンダンが多く、キャベンディシュは目立たない存在であった。さらに、ドールのキャベンディシュはラカタンやラトゥンダンよりも1 kgあたり5ペソ程度安い。フィリピンのバナナ研究者であるエスピノ博士によると、輸出用の大規模プランテーションで作られているバナナのうち、輸出のための基準（大きさや傷の有無など）を満たさなかったものが国内に流通しているということであった。値段と販売量から考えると、2002年の段階ではスーパーマーケットの買い物客はキャベンディ

シュよりもラカタンやラトゥンダンを高く評価していたと思われる。これまで慣れ親しんできた味が評価されていたのだろう。

表5. 現地調査に基づくマニラのスーパーマーケットと市場におけるバナナの値段

	ラカタン	ラトゥンダン	セニヨリータ	キャベンディシュ	サバ
スーパーマーケット					
2002年					
Rustan Harrison Plaza	33	33		28.75(ドル)	
Robinson	30				20
2005年					
Landmark	31.25	30		34.75(ドル)	2.4*
SM Makati	26(Dizon)			32(ドル)	
2006年					
Landmark	35(Dizon)	32		37.25(ドル)	2.4*
SM Makati	33(Dizon)	31(Dizon)		38(ドル)	25(Dizon)
SM Makati	30	26			23
SM North Edsa	33(Dizon)	31(Dizon)	45(ドル)	38(ドル)	25(Dizon)
SM North Edsa				41 (ドル・プレミアム)	
SM North Edsa	30(Eden)	27(Eden)		28(Eden)	
市場					
2002年					
サン・アンドレス市場	40	40	40		20
2005年					
ファーマーズ市場	30	25			2.5*
2006年					
リベルタッド市場	20	20	12		1(中)*
リベルタッド市場					0.5(小)*
キンタ市場	25	20	25		
ムニョス市場(表通り)	35	35			
ムニョス市場(裏通り)	23	25			1.4*

スーパーマーケットのバナナの数値におけるカッコの中はブランド名を示している。

*：果指一本あたりの値段

2005年、2006年の調査ではスーパーマーケットのバナナ売り場に大きな変化が見られた。特にキャベンディシュの位置づけが変わった。日本のスーパーマーケットと同じように大きさは一定で無傷のバナナがドールの名前とマークの入ったビニール袋で包まれていたのである。輸出の規格を満たさないバナナではなく、輸出されているバナナと同じ品質のバナナが日本と同じ方法で売られていた。また、その値段もラカタンやラトゥンダンに比べて高くなっていた。ラカタンやラトゥンダンの値段がわずかに上昇した程度であるのに対して、キャベンディシュの値段が1 kgあたり10ペソ程度という大幅な上昇を見せたためである。

2006年、SM North Edsaのスーパーマーケットでは3種類のキャベンディシュが売られていた。1つは他のスーパーマーケットでも見られた普通のドールのキャベンディシュであるが、もう1つは袋にPremiumという表示があったドールのキャベンディシュ、さらにEdenというラベルの貼られたキャベンディシュである。最高級のキャベンディシュの値段は普通のキャベンディシュよりもさらに1 kgあたり3ペソ高い。一方、Edenのキャベンディシュは24ペソ/kgとラカタンやラトゥンダンよりも安く、売られ方も他の品種のバナナと同様に袋詰めはされずに、棚に裸で並べられていた。このことからすると、品種としてのキャベンディシュの評価が高くなったというよりも、輸出されるものと同じ品質のドールのキャベンディシュの評価が高くなったといえる。

一方、ラカタン、ラトゥンダン、サバでも2005、6年には多くのバナナにラベルが貼られていた。最もよく見るブランドはDizonである。SM MakatiではDizonのラベルのあるものとなないもの両方が売られていたが、3つの品種すべてでDizonのラベルのついているものが高い。つまり、Dizonは高級なバナナのブランドとして認知されていることがうかがえる。一方、SM North Edsaではキャベンディシュでも見られたEdenのラベルの貼られたラカタンとラトゥンダンがあったが、Dizonのものよりも値段が安かった(表5)。

また、SM North Edsaでは、量的には少ないがセニョリータがキャベンディシュと同様のドールの袋に丁寧に梱包されて販売されていた。市場ではセニョリータが最も安いバナナであり、一般のフィリピン人の評価もラカタンやラトゥンダンよりもセニョリータは低いが、ドールのセニョリータの値段は最高級のキャベンディシュよりも高かった。私がスーパーマーケットでこれを手にとって見ていると店員が「小さいでしょう。」と声をかけてきたことからすると、バナナをよく知らない外国人が珍しがって買うのかもしれない。

このように、スーパーマーケットではバナナのブランド化が進み、その頂点にドールのキャベンディシュが位置している。ラカタン、ラトゥンダン、サバなどでもDizonのブランドが評価されるようになってきている。2002年から2005年の間に、スーパーマーケットの消費者はバナナの品種ではなく、ラベルによって表示されるブランドを評価の基準とするようになったと考えられる。

なお、中村(2005)の中にある「1980年代のフィリピンの輸出用バナナ産業における多国籍企業とその系列農園」という表や藤木(2001)の「フィリピンにおけるバナナ輸出産業の構造」という図にDizonとEdenという名前が見られることから、この二つのブランドのバナナはミンダナオ島で輸出用のバナナ・プランテーションを営んでいる会社の農園で栽培されたものであると考えられる。つまり、輸出用のバナナの栽培技術を用いてこれらのブランドのバナナは栽培されているのだろう。

(ii) 市場のバナナ

2002、5、6年の3回の調査で合計6つの市場を見てまわった。売られているバナナの品種では、ラカタンとラトゥンダン、サバがほとんどすべての市場で、セニョリータは半数程度で見られた。スーパーマーケットにあるキャベンディッシュは存在しない。また、バナナにラベルがついていたり、袋詰めされていることはない。つまり、ある品種のバナナとして売られており、ブランド化は全くされていない。

バナナの値段には市場によって違いがある(表5)。最も値段が高かったのはサン・アンドレス(San Andres)市場であった。この市場は観光客向けのホテルが多数存在するマラテ(Malate)地区に位置し、観光ガイドブックにも南国のフルーツを買うならここと紹介されている。市場の入り口にある果物屋さんではマンゴーなどがピラミッド型に並べられ、天井からはバナナがつるされていた。外国人観光客だということで高い値段を提示されたと思われる。

クバオ(Cubao)地区にあるファーマーズ市場(Farmers Market)も値段は市場としては高めで、スーパーマーケットよりも少し安い程度である。この市場はショッピングモールのすぐそばにある。バナナをはじめとして果物はきちんと並べられており、肉や魚も売られていたが他の市場に比べて清潔であった。隣のショッピングモールと客層が重なっていると思われる。

庶民的な市場としてはキアポ(Quiapo)地区にあるキンタ(Quinta)市場がある。道には露店が並び大変混雑している。市場に近づくとなま物特有のにおいが立ち込めており、清潔感はない。少年がバナナを台車に積んで移動しながら販売していた。値段はラカタンが25ペソ/kg、ラトゥンダンが20ペソ/kgで安い。

ケゾン(Quezon)市にあるムニョス(Muñoz)市場では表通りに面した店と市場の奥の店で雰囲気はかなり違う。表通りに面した店ではサン・アンドレス市場と同じように果物が丁寧に並べられバナナが天井からつるされており、値段も高い。市場の奥に入っていくと次第にゴミが目立つようになり、なま物特有のにおいも立ち込めてくる。そこに無造作に積み上げられていたバナナの値段はラカタンが23ペソ/kg、ラトゥンダンが25ペソ/kgで安い。表通りと裏通りでは客層が違うのだろう。

私がマニラで見た中で最もバナナが安かったのはパサイ(Pasay)市にあるリベルタッド(Libertad)市場である。ここもごみごみして日本人から見るとあまり清潔とはいえない庶民の市場である。すべての品種で安いのが、特にセニョリータとサバで顕著である。この市場のバナナが安いのは、すぐ側にバナナの卸売業者の店があり、そこから直接バナナが持ち込まれているためだろう。この市場のまわりには地方からやってきたバナナを満載したトラックが何台も停車しており、そこで荷下ろしされた大量のバナナは市場の側にある卸売業者の店に運ばれていた。卸売業者の店には大量のバナナが無造作に積まれている。

(iii) スーパーマーケットと市場のバナナの比較

ここでスーパーマーケットと市場のバナナを比較してみよう。2002年の段階ではスーパーマーケットと市場で売られているバナナにあまり違いはなかった。ともに生食用ではラカタン、ラトゥンダン、料理用ではサバが主流であった。スーパーマーケットにはキャベンディッシュもあったが、目立たなかった。またラベルはキャベンディッシュについているだけで、その他のバナナには貼られていなかった。さらにキャベンディッシュはドールのラベルがついていてもラカタンやラトゥンダンより安く、ブランドとしての価値を持っていなかった。

しかし、2005、2006年では、スーパーマーケットでドールのキャベンディッシュの存在感が増

しており、値段でもラカタンやラトゥンダンより高くなっていた。さらに、ラカタンやラトゥンダン、サバでも一部がブランド化されており、特に Dizon ブランドは他のブランド化されていないバナナや他のブランドのバナナよりも値段が高い。一方、市場では2006年でもキャベンディッシュは存在せず、ラベルを貼られたバナナが売られることもない。つまり、庶民は付加価値の付いたものではなくできるだけ安いバナナを求めているといえるだろう。

さて、スーパーマーケットでブランド化された値段の高いバナナを買う人たちはそのバナナの何を評価しているのだろうか。まず考えられるのは、見た目である。ブランド・バナナは大きさが一定で、傷のあるものは取り除かれ、洗浄されており、きれいに見える。バナナは傷みやすい果物で、すぐに黒ずむなど傷が目立ちやすいことが欠点であるが、ブランド・バナナはそれに対処している。加えて、成熟具合も調整され、すべて鮮やかな黄色をしている（ちなみに市場では青い状態の生食用バナナも普通に並んでいる）。また、これらのバナナは多分ポスト・ハーベスト農薬が使われており、市場のものに比べて腐りにくく、見た目のきれいさが長く維持される。このような技術は輸出用のバナナ栽培と同様の技術であり、普通の農家に簡単に真似できるものではない。また、特にドールのキャベンディッシュについては先進国で食べられているバナナと同じバナナであるということも一因かもしれない。味という点からすればラカタンやラトゥンダンのほうがおいしくまたフィリピン人の舌にあっていると思われるのだが、値段の高いドールのキャベンディッシュを選択する人はそれよりもブランドの力に魅力を感じているのだろう。

まとめ

マニラでは経済状態に応じて食べるバナナが分化してきているようである。つまり、特定の農場で作られたことを示すラベルを貼られたバナナを食べる中間層と、どこで作られたかわからない、トラックにそのまま山積みされて市場に運ばれてくるバナナを食べる庶民である。

生産のところで述べたように、これまで輸出用バナナの栽培に特化してきた農場が最近国内市場に進出し始めている。一方で、消費者の側から見ると、マニラで付加価値の付いた値段の高いバナナを買うことができるくらい豊かな人が増えてきた。このような消費者側の変化にミンダナオ島の大規模バナナ・プランテーションの一部は機敏に対応している。輸出されるものと同じバナナ、もしくはこれまで食べられてきたバナナであるが輸出されるものと同じ処理をされたバナナを生産し、ラベルを貼るなどブランド化をすることによって消費者の評価を得た。

一方、フィリピンのバナナ生産者の大部分を占める家族経営の農家や、彼らのバナナを扱う流通業者には、輸出されるものと同じ品質のバナナを生産・出荷する能力はない。1998年にミンドロ島東部で調査した Yorobe によると、バナナの集荷の仕組みや保管施設の不備、道路が整っていないなどの問題によってバナナの質が低下せざるを得ないという (Yorobe, 1999)。つまり、彼らはより高い値段で販売することのできるバナナの栽培・流通に参入することが難しい。

生産者の利益については資料がないので想像するしかないが、大規模プランテーションは十分採算が取れると踏んで国内市場に参入してきたのだろう。大規模プランテーションでは機械などの設備投資や人件費、農薬、化学肥料などの費用が必要である一方、土地生産性は小規模栽培の4倍でなおかつ高い値段で売れるバナナを栽培し、道路や港、船などの輸送設備は整っているため品質を維持したまま容易に大量輸送ができる。スーパーマーケットという高い値段でバナナが売れる市場を見出した大規模プランテーションは生産を拡大してその市場で大きな

シェアを獲得し、小規模農場や家族経営の農家はその高価格の市場に参入できないという状況にある。

これまで、輸出用の大規模プランテーションと、国内消費用の小規模農場や家族経営の農家という階層構造がフィリピンのバナナ生産に存在した。しかし、これからは、輸出用および国内のブランド・バナナを栽培する大規模プランテーションと、国内の庶民向けの低価格のバナナを栽培する小規模農場や家族経営の農家というように形を変えて階層構造が維持されていくことになるのだろう。

この問題には今後日本も関係することになる。2006年に日本とフィリピンの間で二国間自由貿易協定である日・フィリピン経済連携協定（EPA）が結ばれた¹⁰⁾。この協定では7品種の「小さいバナナ」の関税が協定発効後10年間で撤廃されることになっている。この7品種にはキャベンディッシュは含まれておらず¹¹⁾、ラカタン、ラトゥンダン、サバ、セニョリータが含まれている（外務省：日・フィリピン経済連携協定）。農林水産省はこれに関して、『『みどりのアジア EPA 推進戦略』の趣旨を実現し、フィリピンにおける農林漁業者の生活向上にも寄与するため、主に小規模農家が生産する小さいバナナやパイナップルについて市場アクセスを改善』と述べている（農林水産省：経済連携チーム）。しかし、現状では小規模農家が生産しているバナナの品質に日本の消費者が満足するとは思えない。現在マニラのスーパーマーケットに並んでいるブランド化されたラカタン、ラトゥンダンならばそのまま日本に輸出しても消費者は違和感なく購入するだろう。このまま日・フィリピン EPA における「小さいバナナ」の関税を撤廃すると、日本政府の意図に反して、大規模プランテーションに有利に働くと予想される。フィリピンの小規模農家の生活向上に寄与するためには、彼らに対する技術支援やインフラの整備も必要であると思われる。

謝 辞

本稿の元になる調査には多くの機関と方々の援助を受けた。2002年の調査は日産科学振興財団・日産学術研究助成（「バナナのドメスティケーションに関する民族植物学的研究」代表者・北西功一）の助成を受けた。フィリピン大学ロス・バニョス校農学部のエスピノ博士（Dr. R. R. C. Espino）とダバオ国立作物研究開発センターのパスクア氏（Mr. O. C. Pascua）、静岡県立大学教授小幡壮先生からはフィリピンのバナナに関する貴重な情報を手に入れることができた。山口大学名誉教授（元・JICA 長期専門家）星出一巳先生には2005年と2006年の調査で自宅に滞在させていただくとともに、マニラについてのさまざまな情報を教えていただいた。山口大学教育学部国際文化コースの学生であった藤井貴子さん、大島愛さん、佐野陽子さん、玉田祥子さん、町中まり子さん、宮本沙織さん、久保田正弘さんには2005、2006年のマニラでの調査の手伝いをしていただいた。バナナの足研究会のメンバーである静岡大学人文学部准教授の小松かおり先生、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の丸尾聡さんと佐藤靖明さん、京都大学大学院農学研究科の四方篤さんからは貴重な意見をいただいた。これらの方々から謝意を表したい。

注

- 1：フィリピンの首都マニラは正式にはメトロ・マニラ（Metro Manila）もしくは National Capital Region（NCR）と呼ばれ、これは12の市（city、マニラ市やケソン市など）と5つの自治体（municipality）からなる。本稿でいうマニラとはメトロ・マニラのこととし、

その下の行政区分であるマニラ市は市を付けて表す。

- 2：栽培用バナナの起源と伝播、品種の多様性については小松他（2006）参照。
- 3：キャベンディシュは厳密には一つの品種ではなく複数の品種からなる品種群である。その中でフィリピンで栽培されているのは Giant Cavendish、Dwarf Cavendish、Umalag、Grand Naine などの品種で（Arias et. al., 2003）、これらはバナナ多国籍企業によって品種改良されたものである。
- 4：日本からの距離が近いことは、運送費が安く上がるということに加えて、輸送時間が短いためより成熟に近い状態で出荷できるのでバナナの品質が良くなるという利点がある（Koseki, 2006）。
- 5：バナナ多国籍企業がミンダナオ島でどのように土地を確保していったかは鶴見（1982）に詳細が述べられている。
- 6：地方（Region）は一番上のレベルの行政区分である。フィリピンは16の地方に分けられ、NCR もその一つである。
- 7：Davao 地方は5つの州（Province）からなっているが、そのうちの一つである Davao del Norte 州はフィリピンで最も多くバナナを生産している州であり（BAS, 2007）、大規模プランテーションが多く存在する州である。この州で2005年に生産されたバナナ 889,402トンのうち、キャベンディシュが852,443トンで95.8%を占めている（Province of Davao del Norte のHP）。キャベンディシュの多くは大規模プランテーションで栽培、輸出されていると思われるので、Davao del Norte 州における輸出用バナナの割合は非常に高いと予想される。
- 8：2002年では1ペソ≒2.5円、2005年では1ペソ≒2円、2006年では1ペソ≒2.3円であった。
- 9：バナナが売られている実際の様子については北西の「フィリピンのバナナ、販売されている品種と価格」のホームページを参照。
- 10：ただし、2008年8月現在未発効。
- 11：キャベンディシュは10年間で2%関税を下げるだけである。

参考文献

- アジア研ワールドトレンド2000-2007「アジア各国・地域経済統計」『アジア研ワールドトレンド』53-147号。
- 藤木俊男2001「フィリピンのバナナ輸出産業における多国籍企業」豊田隆（編）『アグリビジネスの国際開発-農産物貿易と多国籍企業』、pp.200-213。
- Hayami, Y., L. S. Adriano, M. A. R. Quisumbing 1987. *Agribusiness and Agrarian Reform: A View from the Banana and Pineapple Plantations*. College of Economics and Management, Center for Policy and Development Studies, University of the Philippines, Los Baños.
- 北西功一・埴狼星・小松かおり・丸尾聡2000「インドネシアにおけるバナナ文化の予備的報告—スラウェシ島のマンダールとジャワ島のスダの比較から」『山口大学教育学部研究論叢』50（1）29-48。
- 国連開発計画2007『人間開発報告書2006（日本語版）』国際開発協会。
- 小松かおり・北西功一・丸尾聡・埴狼星2006「バナナ栽培文化のアジア・アフリカ地域間比較—品種多様性をめぐって—」『アジア・アフリカ地域研究』6（1）：77-119。

- Koseki, Y. 2006. Taiwan's banana-producing regions and Japanese market. *Geographical Review of Japan*. 79 (5) : 216-236.
- 中村洋子2005『フィリピンバナナのその後—多国籍企業の操業現場と多国籍企業の規制』七つ森書館。
- 鶴見良行1982『バナナと日本人』岩波書店。
- FAO Commodities and Trade Division 1986. *The World Banana Economy 1970-1984 : Structure, Performance and Prospects*. Food and Agriculture Organization of the United Nations, Rome.
- Valmayor, R. V., S. H. Jamaluddin, B. Silayoi, S. Kusumo, L. D. Danh, O. C. Pascua and R. R. C. Espino 2000. *Banana Cultivar Names and Synonyms in Southeast Asia*. INIBAP, Montpellier.
- Yorobe, J. M., Jr. 1999. Banana marketing in the Philippines : performance and prospects for development. in C. Picq, E. Fouréand E. A. Frisson (eds.), *Bananas and Food Security*. INIBAP, Montpellier, pp.445-463.

参考ホームページ (2008年1月5日閲覧)

- Arias, P., C. Dankers, P. Liu and P. Pilkauskas 2003. *The World Banana Economy 1985-2002*. Food and Agriculture Organization of the United Nations, Rome.
<http://www.fao.org/docrep/007/y5102e/y5102e00.htm>
- BAS (Bureau of Agricultural Statistics, Department of Agriculture, Republic of the Philippines) 2003. *Agricultural retail price index, Philippines, 1990-2002*.
http://www.bas.gov.ph/downloads_views.php?id=31
- BAS 2005a. *Banana: Trends in Production, Trade and Price, 2000-2004*.
http://www.bas.gov.ph/downloads_views.php?id=128
- BAS 2005b. *Crops statistics of the Philippines 1990-2004*
http://www.bas.gov.ph/downloads_views.php?id=124
- BAS 2006. *Agricultural retail price index, Philippines, 1995-2004*.
http://www.bas.gov.ph/downloads_views.php?id=159
- BAS 2007. *Statistics on major crops 2001-2006 Regional and Provincial*
http://www.bas.gov.ph/downloads_views.php?id=218
- Country STAT Philippines <http://countrystat.bas.gov.ph/>
- FAOSTAT <http://faostat.fao.org/default.aspx>
- 外務省：日・フィリピン経済連携協定
http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/fta/j_asean/philippines/jyobun.html
- 北西功一・フィリピンのバナナ、販売されている品種と価格
<http://www.edu.yamaguchi-u.ac.jp/~sokoku/Philbana05/Phil05sel/Philbana05sel.html>
- National Statistics Office, Republic of the Philippines <http://www.census.gov.ph/>
- 農林水産省：大臣官房国際部 経済連携チーム2007『経済連携協定(EPA)・自由貿易協定(FTA)をめぐる状況』
http://www.maff.go.jp/sogo_shokuryo/fta_kanren/fta-1.pdf
- Metro Manila Price Bulletin <http://www.bas.gov.ph/pwatch.php>
- Province of Davao del Norte <http://www.davaonorte.gov.ph/index.htm>

財務省貿易統計 <http://www.customs.go.jp/toukei/info/index.htm>